

## 「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第 70 回

『時代の舵取り ～ どんな小さなことにも喜ぶ ～』

2021年8月14日 筆者は、成城ホール（世田谷区）での『樋野興夫「言葉の処方箋」講演会 & 上映会、田島玲子・上野旬也コンサート』で、柳田國男（1875-1962）と新渡戸稲造（1862-1933）との繋がりを質問された。突然の質問に大いに驚いた。柳田國男が、成城学園駅の周辺に住んでいたかろうであろうか？「30年後の医療の姿を考える会」編の『メディカルタウンの地方学』（2008年）の筆者の文章を拝読されたのであろうか？

柳田國男は、日本の農政学の先駆者だった新渡戸稲造の影響を強く受けている。台湾総督府の任を終えて帰国した新渡戸稲造の講演『地方（じかた）の研究』に柳田國男は大きな感銘を受けたとのことである。その後『郷土会』が発足している。東京・小日向の新渡戸稲造邸で、新渡戸稲造を世話人とし、柳田國男を幹事役とした研究会で、地方文化に興味をもった農政官僚や研究者、知識人らが集い、自由で活発な議論が行われたとのことである。この『郷土会』は新渡戸稲造が国際連盟の事務次長としてスイスに赴任するまで毎月1回、60回以上継続されている。「貧困に苦しむ農民の救済と自立という共通の問題意識をもった二人が中心となり、日本の農村のありかたや地方の保護について広く話し合う場であった。」と若き日に聞いたものである。これこそ、「どんな小さなことにも深い意味を見出して喜ぶ」の新渡戸稲造の精神であろう！そして、柳田國男は、新渡戸稲造の推薦によって、国際連盟委任統治委員に就任してジュネーブにも滞在することになった。

日本は、これから どんどん人口が減少し、高齢化は進む というといわれている。いま75歳以上は日本全国で10人に1人くらいであろうが、2050年には4~5人に1人になるといわれている。既に2人に1人、5人に1人が75歳以上という町もある。『がん哲学外来』（to be 出版；2008年）の表紙は、人口約40名、空き家約60%の筆者の故郷の写真である（添付）。まさに「時代の事前の舵取りのモデル」ではなかろうか！？

# がん哲学外来

メディカルタウンを追いもつめて

樋野 興夫

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授

